

宝永6年度(1709)京都での丹波与作物歌舞伎狂言の上演をめぐる ——絵入狂言本研究ノート

赤間 亮(立命館大学文学部 教授)

E-mail rat03102@lt.ritsumei.ac.jp

要旨

京都大学文学研究科図書室本の絵入狂言本『両州連理の松』と『丹波与作物』は、いずれも宝永5年(1708)秋に大阪で初代芳沢あやめが重の井を演じたのを承けて上演された狂言である。しかし、いずれも欠落のある不完全本であり、とりわけ、『両州連理の松』は、2丁のみの零本とされてきた。原本調査の結果、長らく合綴されていたことは明らかであることから、この2点は元々1冊の狂言本として出版された可能性を指摘する。

abstract

"Ryōshū-renri-no-matsu" and "Tanba-yosaku," both illustrated Kabuki play books in the library of the Graduate School of Letters, Kyoto University. They were performed in Kyoto in 1709, following the performance of Shigenoi by Ayame Yoshizawa performed in Osaka in the autumn of 1708. However, all of them are incomplete, and especially as for "Ryōshū-renri-no-matsu" there exist only two pages. As a result of the investigation of the original manuscripts, it is clear that they had been bound together for a long time, suggesting the possibility that these two works were originally published as one book.

1. 中野文彦氏旧蔵『丹波与作物』『両州連理の松』

ここに不思議な絵入狂言本がある。宝永6年(1709)京都の劇場で上演されたと推定される『両州連理の松』(以下、『両州』と略す。)というタイトルの狂言本で、現在、京都大学文学研究科図書館に貴重書として保管されている。

本書は、『古典文庫409 上方狂言本 七』(1980年)に翻刻紹介されており、つとに知られていた資料であるが、その書誌解題によると、表紙がなく、2丁(全4頁)のみの零本、挿絵が見開き1丁分を占めるので、本文は実質1丁分という不完全なもので、全貌はつかめない。したがって、この狂言については、従来あまり注目されてこなかったと思われる。また、刊行当時は、中野文彦氏の個人所蔵本ということで直接のアクセスが限定され、『古典文庫』の翻刻と解題、ならびに口絵に掲載された図版(3頁分)を以て、ほぼ2丁分の全容が紹介されたため、それ以降、原本の確認がされてこなかったものと思われる。

この間、『近松全集』第17巻(解説編)(1994年)にも本書は紹介されているが、ここに取り上げられた理由は、『両州』本書の冒頭に「此度の狂言はあやめ大阪で仕りました、丹波与作物を入れていたします」とあること

から、近松作『丹波与作物待夜のこむろぶし』を取り入れた作品と判断されたためである。ただ、第17巻の項目「28② ぬびす講結御神(丹波与作物待夜のこむろぶし)」(東京芸術大学図書館蔵本)の解題の次に、項目番号もなく『両州』の解題が続いており、『両州』は『ぬびす講結御神』(以下、『ぬびす講』)の関連資料であると考えられた結果と思われるが、『ぬびす講』と『両州』とがどのような関係にあるのかが明確ではない。

一方、『丹波与作物 待夜のこむろぶし』(以下、『丹波与作物』)という内題を持つ絵入狂言本もあり、『両州』と同帙で同図書館に保管されている。本書も、『両州』と同様に『古典文庫409』に紹介されており、その書誌解題によれば、やはり表紙を欠き、表紙見返の役人替名付も欠、本文も「十一」丁以下を欠いている。ここでは、『丹波与作物』は、『ぬびす講』の内題を彫り替え、挿絵と本文にも一部変更を加えた後修本と結論づけられ、翻刻された『ぬびす講』(東京芸術大学附属図書館本)の対校本として用いられた。『古典文庫409』によれば、本書も中野文彦氏の所蔵本とある。

『ぬびす講』『両州』『丹波与作物』の3作品は、宝永5年度前半に上演されたとされる近松門左衛門作、竹本座上演の浄瑠璃「丹波与作物待夜のこむろぶし」を元に、あるいは直接の影響を受けて歌舞伎化されたも

のである。中野文彦旧蔵本には、他に『狐川今殺生石』があるが、3点の内2点が丹波与作物ということになり、偶然としても現在にいたるまで、よくぞ離ればなれになることなく伝えられてきたものだと思う。

2. 考証の経緯

宝永5年(1708)の京阪での丹波与作物歌舞伎狂言について、研究者による最初の記述は、伊原青々園による「京阪歌舞伎年代記」(雑誌『歌舞伎』168号 1914年8月)であるが、これは『役者謀火燵』の記述により芳沢あやめがこの年、京都で「丹波与作物」のお乳の人を演じたとするに過ぎない。本格的な記述は、雑誌『上方』に掲載された秋葉芳美の「京阪歌舞伎年表より」である。

まず、秋葉は、その「二」(『上方』15号・1932年3月)で、

○秋 大阪、岩井半四郎座、「丹波与作物」(待夜の小むろふし)芳沢あやめ、岩井竹松、後の四代半四郎(通説三代)の三吉にてお乳の人大當り。「竹本筑後掾正本の通」義太夫節にて所演。チョコボの嚙矢?

○十一月 京 夷屋座、顔見世「ゑびす講結御神」(待夜の小むろふし)芳沢あやめのお乳の人大出来。座附(榊山小四郎)口上(若林四郎右衛門)ゆるぎ亀右衛門(竹島幸十郎)、弥三左衛門(柴崎林左衛門)等。この時の異本に『兩州連理の松』(南木芳太郎氏蔵)と題したものがある。

と記したが、次の「三」(『上方』19号・1932年7月)において、

○九月 大坂 岩井半四郎座、「丹波与作物」(待夜小むろふし)芳沢あやめ、岩井竹松、後の四代半四郎(通説三代)の三吉にてお乳の人重の井大當り。丹波与作物は山下又四郎。「竹本筑後掾正本の通」義太夫節にて所演。チョコボの嚙矢?

「役者胎内搜」(宝永六年三月 坂)あやめ條に「去秋大坂岩井座で丹波与作物の狂言にお乳の人重の井となられ、我子三吉馬子に成、屋敷で名乗あひ前後を見ての忍び涙、いかな男立も紙取出し目をこする愁ひの大名人……」。

○十一月 京早雲長太夫(座本夷屋松太夫)顔見世「ゑびす講結御神」(待夜の小むろふし)作者佐渡島三郎左衛門。津川万太夫のお乳の人重の井大出来。馬子自然生の三吉(村山万之丞)丹波与作物(沢村長十郎)関の小万(岩井玉の江)角力の関取うん太平(藤川武左衛門)本間弥三左衛門(金子吉左衛門)博多小女郎(山下亀之丞)角力の関取伊達右衛門(山下京右衛門)ゑびす松太夫之介(夷屋松太夫)等。

○同 京 布袋屋梅之丞座(座本榊山四郎太郎)「兩州連理の松」(三番続)(若林四郎右衛門)お

乳の人重の井(芳沢あやめ)ゆるぎ亀右衛門(竹島幸十郎)本間弥三左衛門(柴崎林左衛門)座附(榊山小四郎)等。「役者胎内搜」によれば上演の豫定であったが中止せしものゝ如し。

と改めた。「二」の段階では、『ゑびす講』の配役を『兩州』の出演役者から採り、『兩州』をその異本としていることから、おそらく『上方』の編輯人である所蔵者の南木芳太郎から得た情報をもとに、原本未確認のまま記した可能性が高い。ところが「三」の段階までに南木所蔵の『兩州』を直接閲覧する機会を得たため、東京芸大本の『ゑびす講』、かつ秋葉の手許にあった『役者胎内搜』(京)の情報を加えて、修正したものであろう。

なお、『役者胎内搜』(京)は、高橋比呂子が秋葉家の調査により再発見して『演劇研究』14号(1991年1月)に翻刻本文を掲載するまで所在不明であった。

『演劇史研究 第三輯』(1933年10月)に掲載された高野辰之編「歌舞伎狂言本解題」では、「ゑびす こう結御神」の項に

此の外内題の下に「よし沢あやめ仕候」とあるものもあるが、役人替名を欠く。丹波与作物は芳沢あやめの当り芸で、何回も興行して居つて、その年代を定め得ない。

とし、また『兩州連理の松』の項では、

一幕物。宝永六年亀屋桑之丞座興行か。版元不明。役人替名を欠くも、本文巻頭に「座本榊山口上、若林舞台へ出、此度の狂言はあやめ大阪で仕りました、丹波与作物を入いたします」とあり、芳沢あやめが大阪で丹波与作物を演じて好評だった宝永五年十一月の直後京都榊山座で上演された事が知れ、榊山小四郎は此の数年間の中京都で座本をしたのは宝永六年だけであるから興行年代は六年と断定し得る。(梗概略)元祿劇としては珍しい一幕だけの御家騒動物であり、全然笑劇として脚色されてある。

と、詳しい紹介がある。年代的な近さからみて、一幕物とした本書が、秋葉の見た南木本と同一のものである可能性は高く、ここで記された梗概から、高野辰之(あるいは実質的編者と目される高橋宏)の見た『兩州』は、旧中野本と同じ2丁のみであった筈である。2丁のみで完結する絵入狂言本の事例は他にはなく、完本とした場合に表紙等の体裁はどうだったのだろうか。また、口上にある「三番続」との矛盾については、言及していない。

この後、南木本『兩州』の消息は途絶えるが、祐田善雄の「近松作の歌舞伎狂言本五種・その他」(『ビブリオ』10号 1958年3月)には、「けいせい弘誓船」について触れた箇所、「四千余点、二万数千冊の南木文庫を譲り受けられた岡島真藤氏に、先般同書の存否を問合せたところ、氏から文庫の中に在った記憶はあるが戦災で焼失して惜しい事をしたという御返事を頂い

た。」とあり、南木本『兩州』も焼失してしまった可能性がある。

しかし、同じ祐田が発表した「宝永・享保期の浄瑠璃狂言」(『ビブリア』18号 1961年3月)の中に、中野本『丹波与作』と『兩州』が姿を現す。

祐田は、『丹波与作』を大坂岩井座の狂言本と認定し、『ゑびす講』はその改版であるとしている。祐田によれば、

- ・本文六丁半の端本で、欠けているのは、題簽、見返しと十二丁目以下の三丁半に相当する部分である
- ・八文字屋の出版で、『ゑびす講』と全く同じ本文であり、欠丁は『ゑびす講』で容易に想像することが出来る

という。また、相違点も挙げる。

[丹波与作]

内題 丹波与作 待夜の小むろぶし よし沢あやめ仕候
柱記 与作
挿絵 [役者名、大でけ、大あたり]の記入なし
本文 五丁表一行目
(おくへ入)道中双六初口ニ有(所へ)

[ゑびす講]

内題 ゑびす講結御神 待夜の小むろぶし 顔見せ大あたり
柱記 与作 夷
挿絵 [役者名、大でけ、大あたり]の補記あり
本文 五丁表一行目
(おくへ入)給ふ然る(所へ)

さらに、

『丹波与作』は題簽や見返しを欠くために役者替名附が不明であるが、初口に道中双六があって、とあり、現状は6丁であるが、「道中双六」の詞章が「初口」にあったことが記されている。

また、『兩州』に関しては、

巻頭の二葉だけしかない断簡だけれども、序開きに「座本榊山。口上若林ぶたいへ出。此度の狂言はあやめ大坂で仕りました。丹波与作を入れています」と述べている通り、布袋屋座が早雲座の『ゑびす講』に対抗して上演した三番続狂言であって、入れ事にあやめの『丹波与作』を使つたことが、この断簡で判るであろう。

としている。これを以てしてもなお、旧中野本と南木本が同一本である確証は得られないが、三番続でありながら、一幕しか存在しない状況は一致している。

3. 土田衛の考証

その後、祐田は、1977年9月刊の岩波文庫『曾根崎心中・冥途の飛脚 他五編』の補注四十二(p.358)で、同様の報告をしているが¹⁾、それを承けて、土田衛が中野文彦本を調査し、全貌を翻刻紹介したのが『古

典文庫 409』(1980年)ということになる。土田は、挿絵に大坂・岩井半四郎座に出勤していない金子吉左衛門の痕跡があること、また他の改刻跡から『丹波与作』を『ゑびす講』の改刻改題本(後摺)と判定した。そして、『役者謀火燧』(坂)芳沢あやめ評に「津川殿が京で去顔見世に、丹波与作のおちの人にて当られしに、又あやめ殿せられたれ共、かへつて津川殿程にないと申た」とある記事から、顔見世でのあやめの重の井としての出演があったと推定、この年度の座組に矛盾のない丹波与作物の『兩州』を置いた。

『兩州』については、秋葉の考証に触れ、『役者胎内搜』(京)にみえる、顔見世の上演が中止されたという記事と、『役者謀火燧』(坂)にある、上演したという記事との齟齬については、『役者胎内搜』(京)がこの段階では所在不明で確認できなかったため、「中止が事実とすれば」と仮定し、その後、宝永6年度中にあやめは重の井を演じたことになり、それが『丹波与作』である可能性が高まるとしている。その結果、上演過程と狂言本の出版の関係は次のように整理されることになった。

宝永5年秋 大坂・岩井座「丹波与作」

重の井:芳沢あやめ「大当り」

宝永5年11月 京都・布袋屋座「兩州連理松」[狂言本]

重の井:芳沢あやめ「半太夫ほどにない」

※『役者胎内搜』(京)によれば、上演せず。

宝永5年11月 京都・早雲座「ゑびす講結御神」

重の井:津川半太夫「当り」[狂言本]

宝永6年度中 「丹波与作」

重の井:芳沢あやめ「半太夫ほどにない」[狂言本]

※「兩州」の上演がなかった場合のあやめの重の井評は、この時のもの

また、土田はその解題で、『丹波与作』の頁数を12頁、すなわち6丁としており、祐田の調査時より半丁少なくなっている。

次に、これらの作品について触れたものに『近松全集』第17巻(解説編)(1994年4月)があり、この段階では、『役者胎内搜』(京)全文が紹介されていたため、「秋に大坂岩井座で重の井役で当った芳沢あやめが、京上りの顔見世でもこの役を演じるであろうという噂を記し、顔見世延引のため結局は上演が見送られた」という経緯を追加するが、上述の土田説を踏襲している²⁾。

土田はその後、『歌舞伎年表』補訂考証 宝永4年～7年 宝永編其二(『演劇研究会会報』28 2002年6月)において、『役者胎内搜』(京)芳沢あやめ評³⁾を再考し、

- ・布袋屋座の顔見世にあやめの重の井役での上演があるという情報は「噂」であること
- ・早雲座が先取りして上演していること
- ・上演を予定していた演目が「兩州」である証拠にはならないこと

- ・「両州」の配役の組み合わせは、宝永 6 年度以外にないこと
- ・『役者謀火燧』により、宝永 6 年度中にあやめの重の井役の上演があること

という理由から、「両州」を顔見世興行での上演と限定せず、宝永 6 年度中の上演とした。次の如き上演記録に整理できる。

宝永 5 年秋 大坂・岩井座「丹波与作」

重の井:芳沢あやめ「大当り」

宝永 5 年 11 月 京都

重の井:芳沢あやめ の噂あり

※『役者胎内搜』によれば、顔見世は延引・上演せず。

宝永 5 年 11 月 京都・早雲座「ゑびす講結御神」

重の井:津川半太夫「当り」[狂言本]

宝永 6 年度中 京都・布袋屋座『両州連理の松』

重の井:芳沢あやめ「半太夫ほどにない」[狂言本]

以降 享保 14 年まで「丹波与作」

重の井:芳沢あやめ (没年までの可能性)[狂言本]

※宝永 7 年度以降享保 14 年までの間のあやめによる

重の井の出演記録は現状では見当たらない。

その結果、絵入狂言本『丹波与作』は上演記録との連結ができなくなり、上演年表からは消滅することになった。現在、筆者等が編集集中の『絵入狂言本総覧』では、本文不完全のため、上演年上演地が不明の事例は数点あり、また、上本が、読み物として再刊されたものや、享保 10 年以降は、改刻再板本で、上演実態を伴わないと思われる作品も採録する予定である。『丹波与作』もその一つの作品とせざるをえないのだろうか。

4. 原本閲覧を経て

ところで、2020 年から 2021 年にかけてのコロナ禍により、貴重書などの原本調査は、所蔵機関の閲覧サービスの停止により困難を極めることになった。筆者は、2021 年の 10 月になり、京都大学文学研究科図書館は学外研究者への閲覧が可となったのを受け、閲覧の許可を得た。『絵入狂言本総覧』編集のための書誌情報を確認するためである。

上記 2 点の中野文彦旧蔵本の現況は、やはり『古典文庫 409』に初めて翻刻・紹介された宝永元年(1704)京都亀屋座上演『狐川今殺生石』(以下、『狐川』)と合せて 3 点が「風流曲三味線」の筆記外題簽を添付されて同帙に収まり、「国文学 pd30」の請求番号が付与されている。「風流曲三味線」は、『狐川』の見返しにある広告のタイトルを採ったものであり、同梱 3 点のいずれの書名でもない。

3 点は何れも本紙から耳が出た状態で化粧断ちすることなく裏打され、そのノドの部分の裏打紙に 2 箇所の中綴り穴を開けているから、本来は、3 点を合綴して 1 冊の状態であった可能性もある。帙は、裏打後の寸法に合わせて作成されており、かつ外題の間違いから、京

都大学に所蔵が移る以前に作成されたものであろうか。1 冊目の『狐川』の 1 丁目表には、京都大学に収蔵後の様々な印記やラベルの他、「寄贈」枠印に「中野莊次」と書込まれている⁴⁾。

さて、『狐川』の書誌を取り終え、『両州』と『丹波与作』とを手にとって、驚きを隠せなかった。なぜなら『両州』と『丹波与作』とは、現状では、紙縫りで別々に綴じられているが、原紙の綴り穴や虫損の位置が一致している。もう一度、『狐川』と比べるとこちらの綴り穴は一致していない。加えて、『両州』2 丁裏の下部にある原紙のシミ跡と『丹波与作』1 丁表のそれとが一致している。

さらには、両書の原紙ノドの部分には、墨書で「一」「二」(『両州』)、「四」「五」「六」「七」「八」「九」(『丹波与作』)と連番が打たれている。裏打時に、錯綴をおこさないように、予め書き込まれた番号であると推定できる。因みに、『狐川』にも同様の墨書があるが「〇一」「〇二」・・・となっており、ここからも裏打以前には、『両州』『丹波与作』と、『狐川』との 2 冊の状態であった時期が存在したことが分かる。

『両州』と『丹波与作』の間の「三」の丁が欠けている問題は残るが、本書が出版されたあと、かなり早い段階で、『両州』と『丹波与作』は一緒に綴じられていたことが確実であり、『両州』と『丹波与作』が一冊の狂言本であった可能性も考えておく必要があるのではないかと思量するに至ったのである⁵⁾。

5. 『両州連理の松』と『丹波与作』の関係再考

これまで、旧中野本の『両州』と『丹波与作』は、一つの作品として認識されたことは一度もない。前提として、別本とし扱われてきたものである。

『両州』と『丹波与作』は、ノドの墨書連番において、「三」が欠けているものの、繋がっている。ところが祐田の解題によれば、祐田が見た段階から土田の段階で、『丹波与作』は、半丁分が失われており、祐田解題に示す『丹波与作』の「初口」の半丁が「三」にあたりとすると、墨書連番においても『両州』と『丹波与作』は連結することになる。前節でも述べた通り、少なくともフィジカルな理由により、ある段階までは原本の状態からみて、合綴されていたのは間違いない。

いま、ここでこの 2 作品が、出版当初から一冊の狂言本であった可能性を積極的に肯定する立場で論を進めよう。

秋葉は、『両州』を「異本」と表現するが、旧中野本の『両州』部分のみでは「異本」ではなく、別物と言うに相応しいものであり、「異本」とする理由があったと思われる。また、南木本については、端本や零本であるという表現がなく、題簽や表紙等の欠落があったとしても「完本」のように“見えた”可能性が高いだろう。さらに、異本とするのであれば、『ゑびす講』と『両州』には、何らかの共通点があるはずである。

一方で、『丹波与作』は、本文一丁表にある内題を

彫り替え、挿絵と本文の数カ所に変更を加えた『ゑびす講』の改刻本であり⁶⁾、「異本」にあたる。

ところで、『兩州』の内容は次の通りである。

丹波由留木家の調姫と上州入間家の松ヶ枝姫とは、それぞれ入間家と由留木家へ相互に入興する事となっていたが、松ヶ枝姫の興入が捗らない。由留木の家老亀右衛門は様子を探りに下向し、姫に出合い、そのまま馬に乗せて連れ去ろうとするが、弥三左衛門に止められる。弥三左は、夜になると姫が牛になるという噂があると語るため、二人で正体を見届けることにする。継母とその弟団之丞が御家を奪うため、岩額の牛の生油を用いたことで人の影は皆牛に見えることが判明する。そこで、二人の力で悪人を退治し、両国の祝言の用意が整う。

つまり、狂言外題「兩州連理の松」の意味は、「丹波与作」が由留木家の御家騒動を描くのに対し、「兩州」が入間家の御家騒動を一幕で描いたもので、この二つの御家騒動が収まって「兩州」がそれぞれ「連理」となるという構成になるらしい。従って、「兩州」と題するには、由留木家側の騒動がセットになる必要があり、その内容からも『兩州』と『丹波与作』が連続する必然性があるのである。

問題の一つは、『兩州』が 2 丁、それに続く『丹波与作』には祐田の報告にあるように「初口」が半丁あるとすると、その丁の表側はどうなっていたのかである。一つの可能性は、「初口」は半丁のままだったかもしれない。「初口」の「道中双六」は、たとえば正徳 3 年(1713)正月京都亀屋座上演の狂言本『福引巳午大竈』のように役人替名付の上部(あるいは下部)に詞章を入れたものと予想できる。すると、その表頁も『福引巳午大竈』の如く出版広告であったかもしれない。

一方で、次のような問題点も指摘できるだろう。口開きの幕 2 丁を別途制作して、一部変更しただけで、別座の狂言本と合せて出版するような杜撰な作りの狂言本は事例がない。冒頭に付けた 2 丁の番数を「第一」としながら、『丹波与作』では、内題を彫り替えているにもかかわらず、番表記を「上」「中」「下」(「下」は欠丁)としたままであることも、体裁の不備である。

しかし、こうも考えられる。三番続の狂言は「丹波与作」であり、「上」を「中」とすることはできない。まったく推測になるが、一日の狂言の内、ワキ、二番目が上演されているはずであるから、由留木家と入間家の両家の御家騒動を対比させるために書下ろされた狂言である「兩州」の第一は、一日の五番立狂言構成(ワキ・二番目・三番続)の二番目狂言として上演されたものではないだろうか。これにより、夷屋座に先を越された京都での「丹波与作」上演に新味を加えようとしたのが、布袋屋座の戦略でなかっただろうか。

このように見てくると、『丹波与作』は、宝永六年度中に上演されたであろう芳沢あやめが重の井を演ずる

『兩州連理の松』の中に吸収されることもできるのではなからうか。

以上、仮定の上に推定を重ねるが如き論となったが、200 年以上もの間、折角離れ離れにならずに伝わってきた丹波与作物歌舞伎狂言の一方が、上演記録から抹消されてしまうのを惜しみ、一つの可能性として提示するものである。

[注]

- この補注四二は次の通り。
「丹波与作」を歌舞伎化した狂言本のうち、「丹波与作待夜の小むろぶし」と「兩州連理松」の、いずれも端本が中野文彦氏蔵。「ゑびす講結御神」は東京芸術大学蔵。「丹波与作待夜の小むろぶし」は、大阪岩井座上演。本文が六丁半の端本で、題簽と見返し、十二丁目以下の三分丁が欠けているが、『ゑびす講結御神』と本文が同じで、大体は推測できる。(略)
「ゑびす講結御神」は宝永五年顔見世興行。夷屋松太夫が早雲座の座本を勤めるのに因んで題名をつけた改題本。(略)
『兩州連理松』は巻頭二葉の断簡。序開きに「座本榊山。口上若林ぶたいへ出。此度の狂言はあやめ大坂で仕りました。丹波与作を入れていただきます」と述べていて、布袋屋座でもあやめの丹波与作を取入れて上演したのであった。
- なお、1996 年 10 月 27 日日本近世文学会秋季研究会(於 同朋大学)で鈴木光保による発表「狂言本『兩州連理の松』私見 その上演中止説を疑う」があるが、本稿の考証の経緯に変更が加わるものではない。
- その後、『歌舞伎評判記集成』第 2 期補遺巻に収録された。芳沢あやめ評の該当箇所は以下の通り。
「去秋大坂岩井座で丹波与作の狂言におちの人しげの井となられ我子三吉馬子に成やしきで名乗あひ前後を見ての忍び涙いかな男立も紙取出し目をこするうれいの大名人京へ上られ顔見せにいたさるであらふとちやつと早雲顔見世に津川殿にいたさせしに布袋屋かほ見せ延引に付」(151 頁)
- 中野莊次は、中野文彦の本名であるとの報告がある。「都藝泥布」4 号(2012 年 11 月 1 日) <http://chimei.koiyk.com/tushin4.htm> (最終アクセス日: 2022 年 2 月 18 日)
- 両書の原紙の寸法を示す(単位 cm)。
『兩州』
1 丁目 右縦 21.5 オ上 15.9 ウ上 16.1 左縦 21.5
ウ下 15.5 オ下 15.6
2 丁目 右縦 21.5 オ上 16.0 ウ上 15.8 左縦 21.5
ウ下 15.7 オ下 15.5
『丹波与作』
1 丁目 右縦 21.5 オ上 15.9 ウ上 15.8 左縦 21.5
ウ下 15.9 オ下 15.3
5 丁目 右縦 21.5 オ上 15.8 ウ上 15.7 左縦 21.6
ウ下 15.6 オ下 15.6

6丁目 右縦21.5 オ上15.7 ウ上15.6 左縦21.5
ウ下 15.7 オ下 15.6

糊のきつい裏打のため、原紙自体の伸縮があると思われ、また原紙の折目も裏打後少々
のズレがあるが、上記の通り、ほぼ両書の原紙の寸法は一致する。

- 6) 祐田が挙げた以外に本文に次の異動がある。
『ゑびす講』 ⇒ 『丹波与作』
・七ノ十ウ
のみほそやうな ⇒ のみほすやうな (10行目)
こかけでよつて ⇒ こかけへよつて(14行目)